



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

# NEWS LETTER

特集

## 「みんなで創る！」

常滑市民病院 エントランススタイル壁画プロジェクト

vol. **36** | 季刊 **夏**  
2015



# CONTENTS

INAXライブミュージアム  
NEWS LETTER

vol.36 | 季刊 夏  
2015

表紙写真  
陶楽工房の窓越し。ライブミュージアムを楽しむ人たちが行き交います。建築陶器のはじまり館の前には、友だちおすめのタイルを見に来たお二人。初夏の一日を満喫していただけでしょうか。

(2015.5.30)

撮影：加藤弘一

## 01 [特集] 「みんなで創る！」

常滑市民病院 エントランスタイル壁画プロジェクト

### LIVE REPORT

#### 06 好評開催中

企画展 大地の赤 ベンガラ異空間

常滑地区 春の山車祭り

#### 07

企画展 マカオのアズレージョ ポルトガル生まれのタイルと石畳

ゴールデンウィーク特別イベント みんなでシャボン玉を飛ばそう

常滑クラフトフェスタ

### LIVE SCHEDULE

#### 08 これからの催し

夏休み特別企画 だるまの遊園地2015～子どもは遊びの天才だ

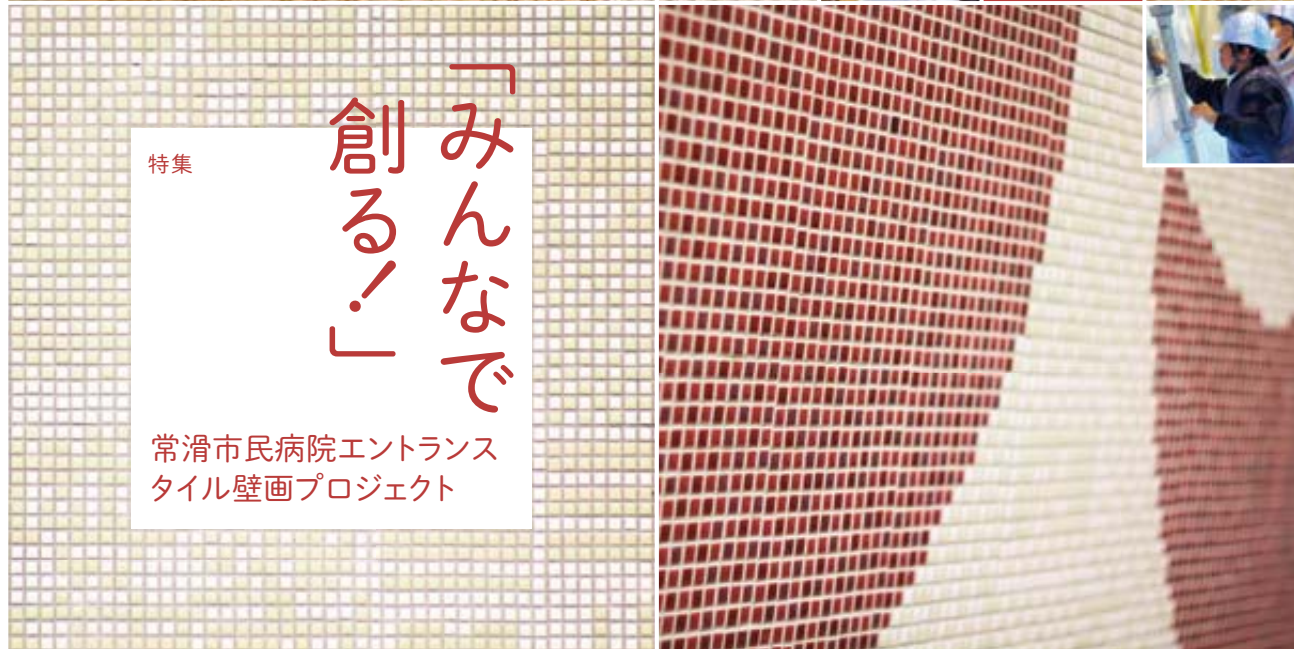
INAXライブミュージアム ナイトミステリーツアー

夜の「世界のタイル博物館」を探検しよう

#### 09

光るだるま大会2015 inセントレア

INAXライブミュージアム フォトコンテスト2015



**「みんなで創る！」**

2015年5月に開院した常滑市民病院。病院のあり方を市民、行政、病院関係者で議論した「100人会議」\*、基本設計について意見交換を重ねたワークショップなど、病院づくりは、市民とともに立場を越えて話し合い、理解し合いながら進められた。そこから生まれた基本理念は「コミュニケーション日本一の病院」。開院後も大切に一人一人の心に刻まれている。こうしたなかで、「建設作業の過程でも市民に参加してもらえないかな」と考えていたのが、新病院建設担当の山田朝夫常滑副市長。吹き抜けのエントランスにある巨大な壁面を見て、「やるなら、ここだ！」と確信した。INAXライブミュージアムの陶楽工房にあるようなモザイク壁画―一人一人が小さなシートを作って、それを合わせる―一つの大きな絵になるような―そんなものができるだろうか。

\*「みんなで創ろう!!」  
新・常滑市民病院100人会議

1 山田朝夫常滑副市長  
2 彫刻家松田重仁さん

## 「みんなで創る」発想

## 常滑から\*

35

## 常滑のモザイクタイル



名鉄常滑駅からやきもの散歩道方面に歩くと、大きなモザイク壁画が私たちを迎えてくれます。50mm角のモザイクタイル約4万8千枚を使い、常滑の街並みを表したものです\*1。

このような小さなモザイクタイルの国産第1号は、常滑で作られました。明治43年、伊奈初之丞\*2が「陶製モザイク」という名前で第10回関西府県連合共進会に出品、発表したものが最初だと言われています。そのきっかけは、日本の窯業発展に尽力した森村組の大倉孫兵衛がドイツ製のモザイクタイルを見せたのが発端でした。新しいやきものの開発に意欲を持っていた初之丞は、その試作に取り組んだのです。以後、常滑でモザイクタイルの生産が始まり、瀬戸、美濃、多治見が続きました。大正13年の伊奈製陶(旧INAX、現LIXIL)の商品力タロクには25mm角や18mm角、色も11色ありました。

常滑の街を歩くと、立派なモザイク壁画ややきもののパブリックアートに多く出会います。モザイクタイルの故郷、常滑をぜひ訪れてほしいです。

\*1:常滑フォンスクラブ50周年記念事業2007年制作  
\*2:伊奈初之丞(1862~1926年)  
INAXの創業者伊奈長三郎の父、土質、モザイクタイルなどの建築用陶器を開発、常滑窯業の近代化の基礎を築いた。

住宮 和夫 (INAXライブミュージアム館長)

\* INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

「最初はね、みんな反対したんです。日に千人も人が来て、これから50年と使われるような公共の場に素人が余計なことをしちゃいかんって」。壁画としての質は保てるのか、デザインはどうする、素人が作るモザイクシートで、タイトルが剥がれたらどうする……。関係者の誰もが「相当大変なことになる」と見通すなか、アートワークのコンサルタント会社と、監修者として彫刻家の松田重仁さんが加わり、エントランス壁画プロジェクトは動き始めた。その大きさは縦3.9m、横16.8m。テーマは「コミュニケーション日本」。巨大壁画を「みんなで創る」前代未聞のプロジェクトの始まりだった。

## 原画を決める

プロジェクトの第一歩として重要な壁画デザインは、愛知県立常滑高等学校から公募することになった。「最初は不安しかありませんでした。ご期待に添えるようなデザインが高校生で考えられるだろうか」と言うのは、澤田真奈美先生。常滑高校は普通科とセ

は1cm角のジュエリーモザイクタイル。シートの大きさは15cm×15cm。そこに縦12個、横12個、計144個のタイルを並べる。深みを出すため色は各色3種類使う。制作するのは、中高生や病院スタッフ、市の職員ほか。その人たちに一番わかりやすい作り方は？ 必要な道具は？ 試行錯誤が始まっていた。

デザイン審査会で原画が決まると、すぐに割付図が作成された。そこから見えてきたのは、2912枚のモザイクシートと約42万個のタイル。つまり2912人が制作にかかわる大プロジェクトだ。

「割付図を見た時点で、これからやることの実態が明らかになって、みんな、やるしかないという気持ちになったと思う。ミュージアムとしては、材料を人数分揃え、制作にふさわしい道具を選び、ベストな作り方を伝えていくこと。そして最後に施工すること。身が引き締まった」とライブミュージアムの住宮和夫館長はふりかえる。大量のタイルは、割付図から必要な色数を数人がかりで数え出し、すぐ発注にかけられた。

夏も終わる頃、ライブミ

## デザイン審査会 2014年6月25日



8人の審査員が60点の応募作品を審査。進行役は松田重仁さん。「壁画にしたらどうか、タイルの良さをうまく表現できるか、そんな視点で考えてみてください」。絞られた7点について、熱い議論が交わされ、最終的に残った3点から最優秀賞が決定した。

## 制作準備・ワークショップ 7月～8月



割付図

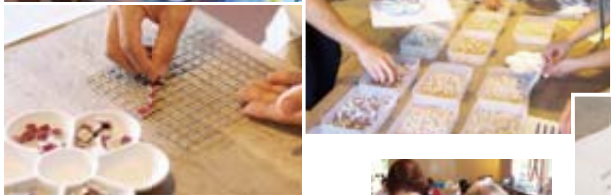
制作を分担する場所と枚数を確認。



病院、学校、行政など壁画制作にかかわる人たちが一堂に。ライブミュージアムから制作方法について説明を受ける。



夏休みの1日。陶楽工房で先生・関係者のモザイクシート制作ワークショップ開催。「タイルの色が微妙だから混ざると大変」「テープを張るとき緊張するね」。



ワークショップの最後に、旧常滑高校に準備された実寸の壁画シートを見学。「こんなに大きいんだ!」「ここに2912枚並ぶんだ」。

優秀賞

INAXライブミュージアム賞

最優秀賞



「集まる人々、続く絆」  
クリエイティブデザイン科3年(当時)  
鬼頭明日美さん

「これからの新しい常滑を感じさせる」  
「タイルで表現するのに一番ふさわしいデザイン」と審査員から講評された。



ラミックアーツ科、クリエイティブデザイン科を持ち、ものづくりの道に進む生徒も多い。澤田先生は、クリエイティブデザイン科2年生全員と、3年生の一部、さらに美術部の生徒に声をかけ、60名がこのコンペに取り組む態勢を整えた。病院づくりに多くの市民がかかわったこと、テーマの意味、これから何十年と常滑市民に愛される病院になること。知る限りの情報を生徒に投げかけ、「へんなものは出せない。きちっと考えて作品を仕上げるように」プレッシャーをかけ続けた。特に3年生については、長い時間をかけて、一人一人と何回もやりとりした。

そうして完成した60作品が、コンセプトとともにA3用紙にまとめられ、壁画デザインコンペティション審査会に持ち込まれた。

## 割付図と制作の具体化

デザインコンペと並行して、INAXライブミュージアム陶楽工房では、壁画の制作方法が検討された。使用するの

ージアムでは制作に必要なタイル、特注で制作した金網、専用テープを各学校に配送。プロジェクトは次の段階にバトナタッチされた。

## 制作開始!

常滑4中学校(南陵、常滑、鬼崎、青海)、常滑高校と病院で、モザイクシートの制作が始まった。常滑高校では生徒、PTA、部活にも呼びかけ、割当の700シートを完成させた。病院では、担当主事の血井敬治さんが、新病院建設に関係する人たちにできるだけ参加してもらおうと奔走した。100人会議のメンバー、病院ボランティア、看護師や医師たちも仕事の合間に会議室にやってきて、興味津々、制作に取り組んだ。「おそらく皆さん、新病院の建設に参加したという証をつくる気持ちで協力してくれたのだと思います」と血井さん。市・病院割当の598シートのうち、500枚以上を病院関係者で制作することができた。

学校で先生たちの制作練習会をした常滑高校。タイルの小分け作業に加わった各学校

## みんなで創る! 9月～10月



高校生も



母たちも



保護者も参加した常滑高校。「むずかしいところがあったらサポートするので、がんばって」と、澤田先生。「完成が楽しみ。新病院に絶対見に行きます」とお母さんたち。



病院スタッフも

の校長先生や教頭先生たち。血井さんも病院で、短時間で作業ができるよう事前準備に気を配った。それぞれの持ち場での影ながらの努力が、2912枚のシートの制作を支えていた。

## 2912枚が 並んだ

制作を終えて、旧常滑高校に運び込まれたモザイクシート。ついに2912枚が原画どおりに並んで巨大壁画の全貌が現れた。レーザーポインターを手にデザインチェックする松田重仁さん。「ここ、グラデーションが止まっている」「そこ、同じような絵柄が続くから入れ替え」。一人一人がつくったシートの個性を生かしながら、一枚の巨大壁画作品として成立させるため、入念な調整が行われた。「みなさんの努力とエネルギーをひしひし感じます。『コミュニケーション日本一』のテーマ通り、対話し、工夫を積み重ねてこられた。病院のシンボルになること、まちがいないことです」と、健闘をたたえた。

## 竣工式 4月4日



無事、竣工式を終えて  
喜びの記念撮影。

## いよいよ施工、 最終段階へ

施工作業は、INAX建築技術専門校の4人の先生が受け持った。「モザイクシートは、作り手も完成度もちがう。現場で予期せぬ対応が求められるかもしれないが、どれも1点ものなので大事に張らない」と。「50年以上も残せる仕事ができるのは誇りです」

「この常滑にタイル施工の専門学校があるのも何か縁を感じました」「それぞれの段階でみなさん努力され、工夫され、次の現場に渡されてきたのだと感じます」。

作業が進むにつれ、見えてくる躍動感あるデザインに、

## 開院 5月1日

## 最終デザインチェック 12月



吹き抜けのエントランスに設置されたモザイク壁画



各学校の先生たちが、分担の場所にモザイクシートを並べる。「これでひと段落。あとは完成を待っただけです」。



全体を見渡して色や図柄のつながりを調整する松田さん。「すごいです。手探りでしたが、よくできている」と、山田副市長。



いざ、新常滑市民病院建設現場へ!



旧常滑高校の教室いっぱいに並んだ2912枚のモザイクシート。



「南陵中は壁画の真ん中を担当します。いい場所だから、みんながんばって」と説明する美術の先生。



中学生も



議員さんも



市長さんも

## 施工 2015年3月2日～20日

INAX建築技術専門校の先生たちによって、次々と張られていくモザイクシート。目地込み作業が終わると壁画の模様がくっきりと浮かびあがった。「これだけ大きな壁画は、なかなかないですよ」と太田恵三専門校校長。



施工現場は緊張の中にも、楽しい雰囲気にも包まれた。

## ついに完成。 そしてこれから

1年半にわたるエントランススタイル壁画プロジェクト。「みんなで創る」という大胆な発想のもと、多くの人たちの巻き込みながら、時間と労力をかけ、知恵を絞って作り上げた。

「相当おもしろいことしちゃったね」と笑う山田副市長。「いいものを作りたいという1点で、みんなの力が合わさり、予想を超えたものができあがった。まさにこのプロセスが『コミュニケーション日本一』。病院のコンセプトが形になりました」。

監修の松田重仁さんも「常滑の方々の病院にかける思いが、とてもいい形で壁画プロジェクトに結集できた。この熱い思いが語り継がれていくことを願います」と、エールを送る。

エントランスに優しい彩りをそえる大きな壁画。その後にある物語を忘れないでいたい。